



JASWHS 公益社団法人 日本医療ソーシャルワーカー協会

Japanese Association of Social Workers in Health Services

令和5年3月30日 第12巻(第4号)

発行：東京都新宿区住吉町8-20 四谷チンゴビル2F

災害支援チーム TEL (03)3351-5038

FAX (03)5366-1058

Mail: dsstsw@jaswhs.or.jp

もくじ

巻頭言 3月11日に寄せて

1. 『被災者の復興』という支援の始まりの日
2. 「祈り、誓い、後世につなぐ ～旧大川小学校をめぐる～」
3. 第14回 JIMTEF 災害医療研修に参加して
4. 石巻だより
5. 災害支援チームからのお知らせ
6. 災害支援ニュース発行のお知らせ

編集後記

◇ 巻頭言 3月11日に寄せて

石巻災害支援チーム 現地責任者 福井 康江



〔2023年3月11日 日和山公園から〕

東日本大震災による被害者

宮城県	死者 9544 人	行方不明者 1213 人	関連死者 930 人
岩手県	死者 4675 人	行方不明者 1110 人	関連死者 470 人
福島県	死者 1614 人	行方不明者 196 人	関連死者 2333 人
全国	死者 15900 人	行方不明者 2523 人	関連死者 3789 人

〔河北新報より〕

石巻市の被害 直接死 3277 人 行方不明 417 人 関連死 276 人
住宅全壊 20,044 戸 住宅半壊 13,049 戸

*2011年3月の人口 160,826 人 2023年2月現在の人口 136,357 人

〔石巻かほくより〕

3月11日は、風が強い日でしたが朝から晴天に恵まれた日となりました。13回忌の年となることや土曜日であったこと、コロナ感染予防による移動の自粛が緩和されて来たことなどから、昨年より人の往来が多く感じられました。また、人々からは2011年の干支も兎年だったとの話が聞こえ、丁度干支が一巡した年月が流れたことを改めて実感することとなりました。

今年の報道では、「祈る」「重ねる」「今も」「生きる・なりわい」と言った言葉や、石巻地方の3市町の住民に東日本大震災の記憶の変化や防災意識を聞いたアンケートが新聞に公表されていた中で、震災のことを「月1回以上思い出す」人の割合が7割以上、家族や親類を亡くした人に限定すると、「毎日思い出す」人が2割との結果が非常に印象に残るものでした。

当日は、なるべく出会った方と話をしてみようと思い、「まだ見つかってなくて。」「景色が変わってしまい、戸惑っている。」「少し受け止めることができたのかもしれない。少しだがやっと人には話せるようになった。」との話を伺うことができました。また、小さなお子さん連れの方々を今

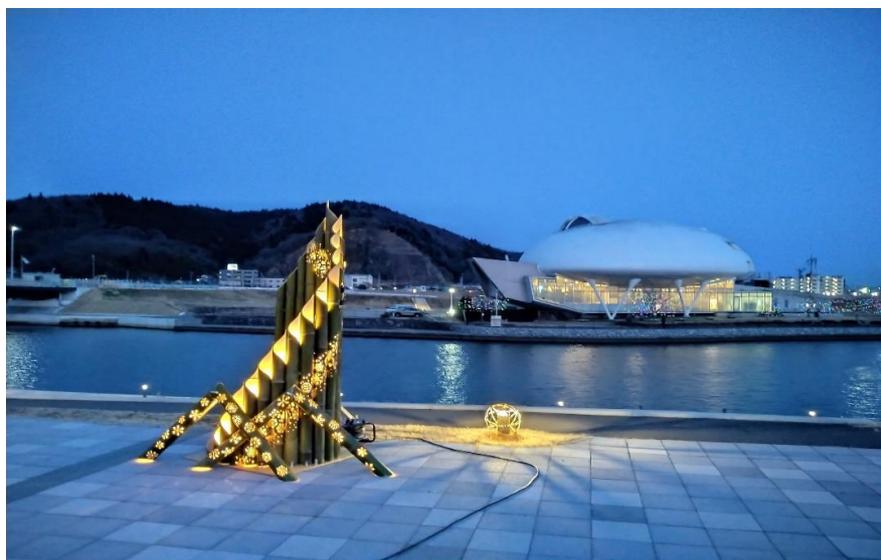
年はたくさん見かけることができ、この春保育園の年長になるとのお子さんが「どうしてこうなったの。何があったの？」と真剣に大人達に尋ねる場面にも立ち会うこともできました。

3月11日の夜、NHKスペシャルで患者・職員の9割となる64名が犠牲となった石巻市立雄勝病院を取材した放送がありました。逃げようとしても逃げられなかった唯一の場所として紹介されていました。亡くなった病院職員のご家族や関係者の方から「職員は被害者、でも患者さんの遺族からしたら加害者でもある。」との言葉があり、正解の分からない答えを12年間問い続けていること、そうした葛藤を抱えた中、この年月を経てやっと少し話せるようになったことを知り、他人事とは思ふことが出来ませんでした。「人の命を救う人たちの命をどう救うのか」といった問いかけもあり、正に私たちが直面する大きな課題であると改めて伝えてゆきたいと思いました。

様々の思いを抱えながら、また新しい一年が始まります。私たちもまた、日々真摯に進んで行きたいと思います。



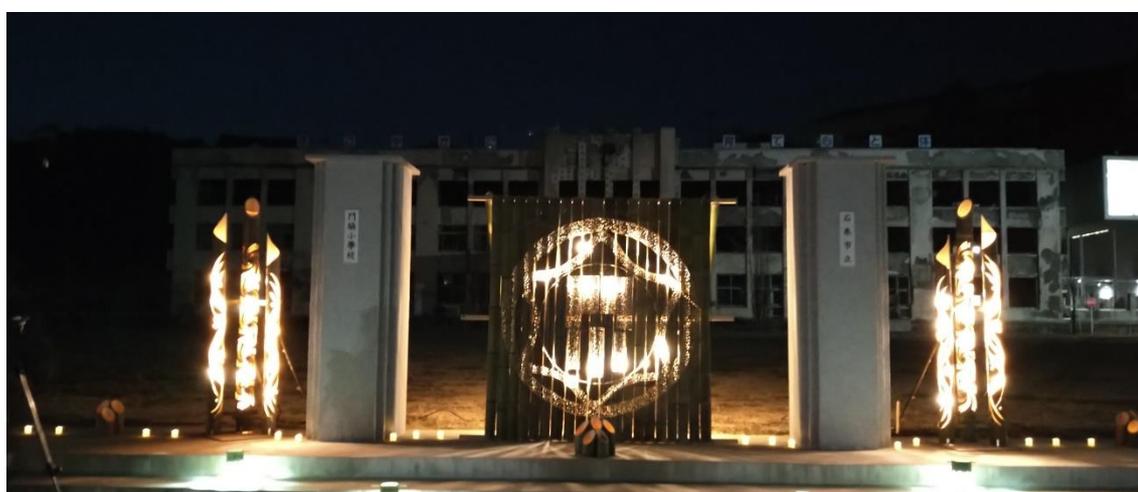
(雄勝病院跡地に建てられた碑文)



(石巻専修大学ゼミ学生主催による 竹明かりこもればいナイト 中瀬・かわまちの風景)



[震災遺構門脇小学校の竹明かりの風景]



1. 『被災者の復興』という支援の始まりの日



文京学院大学 森和子



2011年の東日本大震災発生後に文京学院大学では笹岡先生をリーダーとして発足した被災地支援ボランティアの活動に学生たちと参加しました。その当時、現地に到着したバスの窓から見える光景にただただ啞然とするばかりでした。そして震災から12年の月日が流れ、区切りの年として訪問しようとした自分を恥じることになりました。

1日目は在校生と教員の多くが津波で亡くなった大川小学校の遺構に行かせてもらいました。遺構を拝見しただけでは知りえないお子さんを亡くされた語り部の方の無念な思い癒えることのない苦しみが伝わってきました。学校のすぐ横にある裏山にも登ってきました。子ども達は授業などでよく登っていたそうですが、どうしてそこに逃げなかったのかどんな事情があったのか考

3. 第 14 回 JIMTEF 災害医療研修に参加して

石巻災害支援チーム 現地担当 岩崎 隼生

公益社団法人 国際医療技術財団(JIMTEF/ジムテフ)が運営する第 14 回 JIMTEF 災害医療研修アドバンスコースを 3/19・3/20 の二日間で開催され受講しました。

東京都日本教育会館で研修が行われ、全国各地から約 66 名の受講者がおりました。その中には理学療法士、はり師、柔道整復師、心理士、栄養士と様々な職種の方々が参加されておりました。災害が起きた場合にも多職種で連携して被災者を支援していくことが重要でありそのため今回の研修にて多職種間で情報共有しグループワークを通じて連携を強め実際に災害が起きた場合にも対応できるようにしていくことが研修の目的の一つだと感じました。

DMAT 事務局の方々が講師を務め実際の災害時の対応や発災から急性期の対応についての講義があり、被害状況・交通情報・他機関の動きなどの情報収集を行い発災地に到着した場合に行うべき行動や対応について学ぶことができました。

日本栄養士会の方から災害食の実際について講義があり、被災者の方々がせめて食事する時だけでも楽しみを持てるように災害食の創意工夫を行い食べる楽しみを増やし、飽きずに食べることができる災害食を考えておりました。実際に私も災害食を試食してみました。本来の災害食にひと工夫を加えることで味が変わりとても食べやすく飽きずに食べ続けることが出来ると思いました。

実際の災害を想定して避難所や現地災害医療本部の運営実習を行いました。避難所には様々な被災者がおられるため、環境に配慮することがとても重要であり被災者の声に耳を傾け信頼関係を気づいていくことが大切だと思いました。本部運営を行うにあたり、どの地域に被害が多く、ニーズがどれだけあるのか資源は足りているのかなど確認していかなければならず、支援者をどのくらいの人数を配置していくかも考えて行かなければならないため情報収集と情報整理がとても重要になると分かりました。

今回の 2 日間の研修を通して、災害が起きた場合のソーシャルワークの取り組みや被災者支援についての役割など理解することが出来ました。また、研修参加者でソーシャルワーカーは当協会からの 2 名のみであり、今後は災害医療研修にソーシャルワーカーが積極的に参加していただき、災害支援の知識や技術を身につけたソーシャルワーカーが増えれば被災地支援に大きな影響を与えることが出来ると思います。私自身も今回学んだことを今後の石巻での支援に活かしていければと思います。

4. 石巻だより

～ 震災のときのこと・(市民の思い) ～

石巻災害支援チーム 現地担当 高橋 としみ

母方の叔母が南浜に居ました。その日南浜は津波の後火事になり近づけませんでした。4日目、もう大丈夫だろうと渡波にいる叔母を連れて主人と3人で待避所に向かいました。前日、渡波の叔母が待避所のような人が大勢いるなかでは声を出しても聞こえないから、大きな模造紙に叔母の住所と名前を書いていけと言うのでそのように準備をして出かけました。市内が通れず、大街道を上る事にしました。日本製紙の紙のロールや丸太が道を塞いでいて、さらに10軒近くの飼料会社から流れ出た山のような飼料が散乱していました。そのあたりは今まで見たこともない大きなハエが飛び回っていました。何とかそこを通り過ぎ、石巻中学校の体育館に入り、人の出入りを記入しているノートを手分けして確認しました。30冊くらいあったノートに叔母の名前はなく、隣の門脇中学校に行くと、靴のまま出入りをしていたととても汚く不衛生でした。同じくノートがいっぱいあり、ここでも叔母の名前はありませんでした。無事に逃げただろうと思っていましたが、不安でした。近くの石巻高校の武道場に入り、例の叔母にいわれて書いた模造紙を掲げると、ふっと振り向いた人がいて・・・叔母でした。こんなに簡単に見つかるとは。叔母は母より2歳ほど年下で震災の時は76歳だったと思います。いろいろと苦労した人で忍耐の人でしたが、今回は私たちの顔をみると泣き崩れました。叔母の涙をみたのは初めてでした。叔母は、今日歩いても根岸(渡波の叔母宅)に行こうと思っていたそうです。

その日、叔母は津波がいつのまにか玄関に来ていて驚いたようです。二階に上がり、水かさがどんどん増えて、いよいよ駄目だと思い、屋根に上ったとか。あの叔母がどんな風に屋根に上ったのか・・・不思議です。そして、見回りをしていた行政区長さんが見つけて梯子をかけて助けられたそうです。本当にありがたい事です。叔母はいつもスカートがけで過ごしていましたから、その日もその姿なわけで、さすがに区長さんが、待避所にはその姿では行けないと言われて、近所の家(南浜は坂になっていて、叔母の家辺りまでは完全に流されたが、坂の上の家は残った)にお願いしてズボンと靴をお借りして待避所に行ったそうです。待避所では食べ物を配布するというので何時間も並んだのに、小さい煎餅が1枚配られてがっかりした事などを話していました。その後叔母は渡波の叔母のところに身をよせました。

少し落ち着いてから、叔母の家の跡地がどうなっているのか気になり見に行きました。本当に跡形もなく、瓦礫だけがあり、玄関に敷いた石が残っていました。よく見ると、瓦礫の中から水仙の芽が出ていました。こんな時も季節をたがわず新しい芽がでることにある種の感動がわきました。叔母は猫のひたい程の庭にいろいろの花々を植えて楽しんでいました。この季節ならまもなくハナミズキが咲くはずでした。



5. 災害支援チームからのお知らせ

【1. 書籍販売】

『東日本大震災 医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅠ』

『東日本大震災 医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅡ』

『東日本大震災 医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅢ』

『東日本大震災 医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅣ』

の販売を行っています！



発災から2011年9月30日までの石巻・仙台・大槌町・事務所・災害対策本部の活動の記録を『バトンⅠ』に、2011年10月から2012年12月までの災害対策本部、石巻市での仮設住宅支援・在宅被災世帯支援・市民活動支援、現地SWとの協働の記録を『バトンⅡ』に、2013年1月から2014年3月までの災害支援チーム、石巻市での仮設住宅支援・在宅被災世帯支援・市民活動支援、虐待防止センターでの支援・石巻市社会福祉協議会での支援、現地SWとの協働の記録を『バトンⅢ』にまとめました。そして2017年5月、2014年4月から2016年3月までの災害支援チーム、石巻市での復興公営住宅への入居支援・仮設住宅被災者自立生活支援・グループワーク支援・市民活動支援の記録を『バトンⅣ』にまとめました。

尚、売上げの全額を皆様からの寄付として、本活動の資金にあてさせていただきます。

※ご注文は注文用紙で承ります。(注文用紙はホームページからダウンロードできます)

お知らせ欄から注文用紙表示

https://www.jaswhs.or.jp/about/publish_index.php

注文用紙表示

https://www.jaswhs.or.jp/news/news_detail.php?@DB_ID@=1393



6. 災害支援ニュース発行のお知らせ



次回 第13巻（第1号）発行予定

令和5年6月



◇ 編集後記



石巻災害支援チーム 現地担当 西田知佳子



今年2023年（令和5年）3月11日は東日本大震災から12年目にあたります。現地では年明けで、13回忌という言葉が度々耳にしました。13という数字が新聞紙上でも目に入りましたが、東京の新聞では12年目の12という数字が新聞紙上を賑わしていました。現地の方々の思いと第三者の違いだろうかなどと考えました。

今回の災害支援ニュースは震災に関する特集になりました。私も2月に大川小学校の語り部さんの話を聴かせてもらいました。人は想像を絶する悲劇を目の前にするとそれが過去の出来事であっても、感情が固まってしまうという体験をしました。その当時のことが書かれた地元新聞の投稿記事などには涙がこみあげてくるのに、大川小学校で鉄骨しか残っていない校舎や、子どもたちの姿を彷彿させる壁画を目の前にして、涙が凍り付きました。ご家族・関係者のお気持ち・思いはいかほどでしょう。

数日前、大川小学校から4キロ離れた海岸で、ロボットがまだ見つからないご遺体を検索、4月に入ったら10か所ほどの地点を実際に探すというニュースを聴きました。行方不明の方々が一日も早く見つかりますこと心からお祈りします。

